

無知の知をめぐる考察

嶋津 格

1. 「知る」の文法

日本語でも英語でもそうだが、「知る」という動詞は特殊である。というのも、

I know that ...S₁...

という場合、この **that clause** 中の S₁ (sentence 1) には偽であることがわかっている文を入れることができないのである。

「私は太陽や星が地球の周りを回っていることを知っている」とか「最大の素数が存在することを知っている」と言うことはできない。「知っている」ためには、そのことは真でなければならぬからである。もしこのような文を發した後で S₁ が偽であることがわかれば、同時に know 命題全体も偽となってしまう。だから、「私は知っていると思ったけど実は知らなかったんだね」という風に、發言の訂正が必要となる。

もちろんこれに反して、「信じる (believe)」の場合にはこの制限はない。

I believe that...S₂...

の場合、後に S₂ が偽の命題であるとわかっても「S₂ を (真だと) 信じた」ことに変わりはないから、この believe 命題自体は真であり続けうるのである。この know と believe の差をめぐって哲学する (philosophize) こともできる。

真なる命題にしか使えないという形で、目的節となる命題について、その意味や形式ではなく命題とそれを真にする世界との関係 (真であることを限定するのは know 動詞がもつ奇妙な働きだが、これは単に know 動詞の文法にすぎないと私は考える。そして、哲学の中で大きな部分を占める認識論 (epistemology) は、この点を誤解しているのではないか、という疑いを私はもっている。誤解の論理は以下のように進行する。

・know する仕方がわかれば、その仕方に従って得られる S は常に正しいはずである。

・そのように (正しく) know するにはどうすればよいのだろうか・・・。

かつて認識論の論文や本を読んでいた時、こんな風に議論が進んでいるように感じた。もちろんこれは誤った問題設定である。know という行動にそのような特殊な力があるのではなく、それは単に上記のような文法の問題、つまり know という動詞の使い方の問題にすぎない。つまり、know と believe の間に、(動詞が表現する) 活動としての差があるのではなく、その語を扱うについての社会的ルールに差があるにすぎないのである。ポパー的に (つまり可謬主義的に) 考えるなら、(誤らないことが保証されているような) know する「特別の仕方」などどこにもないのである。

これは確実性 (certainty) の問題にも関係する。たとえば、「知る」ためにはその対象は「確実」でなければならない、といった風に。しかし確実性に関しては、ポパーの文章で以下のようなシャレたものがあつたと記憶する (手元に原文がなく出典不明、多分『客観的知識』)。「もし私の手に指が 5 本あることに私の友人の命がかかっているというなら、私はもう一度手をポケットから出して、本当に指が 5 本あるか数えるだろう。」要するに、確実性についても、それを保証する特別な方法はなく、必要に応じて確かめるだけのことだ、と言っているのだと思う。

2. 『テアイテトス』の読み方

彼の中期の対話篇『テアイテトス』でプラトンが描くソクラテスは、知 (渡辺邦夫訳では「知識」：エピステーメ) について、対話の中で以

下のように議論する。

「知とは何か」というソクラテスの問に対して最初テアイテトスは、「テオドロスさんのところで人が学べること。つまり、幾何学、天文学、計算、音楽、その他教養にかかわるあらゆること（が知だ）。」と答える。しかしこの答は、問を理解していないとしてソクラテスに退けられる。

あたなの答は「〇〇の知」の〇〇の中に何が入るかを答えているにすぎない。私が尋ねているのは、前半の〇〇の方ではなく後半の「の知」の方だ。

たとえば、粘土で色々なものが作れるから、「陶工の粘土」「炉作りの粘土」「レンガ職人の粘土」と言うことはできるが、それらを挙げてみても「粘土とは何か」に答えたことにはならないのだから。

この類比推論は正しいだろうか。少し批判を試みてみよう。粘土は特に何か加工しなくとも粘土であるから、その素材としての一般的性質自体（種類、比重、乾燥させたり炉に入れたりした場合の変化、その他）を云々することはできる。しかし知は、何かの知としてしかあり得ないのではないか。何かを知るという形以外に知それ自体が存立できるわけではない。だから、粘土との類比（「の知」自体を問うこと）はミスリーディングではないか。

あるいは、以下のような含意がこの議論の背景にあるのだろうか。ギリシャ哲学では、エピステーメ（真知：ここで「知」と言われているもの）とドクサ（臆見）の区別が重要と考えられた。この区別を単に、学問的な知（「学知」）と迷信などを含む常識的・非専門的な知（らしきもの、思いなし）の差と考えるなら、特に問題は無い。（ギリシャで発生したともいえる、ある意味「倒錯的」な愛知的）学問は、その限度で非学問的なものから区別可能だし、その区別に意味もあるからである。しかしこれを、誤

りえない真知と誤りえる臆見の差と考えると、我々は迷路に誘い込まれるように思う。

3. ポパーの場合

その場合ソクラテスは、臆見と厳格に区別された意味の真知を問うていることになるだろう。しかしこの問題設定は、ポパー的に見て正しいだろうか。以下この点を考察する。

ポパー的に考えるなら、我々は普遍命題について、事前にその真を知ることはできない。それらはいくまで、仮説でしかありえないからである。それらが反証の試みを生き延びて保持されているとしても、仮説としての資格から真知の地位に上ることができないわけでもない。個別（単称）命題については、少し面倒な議論が必要かもしれないが、これも結局ポパー的にはその真は保証されない。もし疑いがあるなら、同じ実験をやり直してみるだけである（拙稿「発見の論理と心理——ポパー理論の批判的検討に向けて——」ポパー哲学研究会編『批判的合理主義』2001年、参照）。

科学という集团的・社会的営みの中で保持されている現状の（正しさを推定されている）諸命題はあるが、それらは厳密な意味での真知ではないから、その意味では臆見・ドクサにすぎない。それなら、真知を問うソクラテスの問自体が、結局無意味なものとなるのではないだろうか。要するに、ギリシャ人たちが憧れた、獲得の仕方によって他と区別されるような真知などないのである。

4. 無知の知

ではソクラテスの「無知の知」とは何なのか。一つの読み方は、関曠野『プラトンと資本主義』に示される、「無敵の論争法」（嶋津の命名）である。当時の有名な知者（ソフィスト）たち

を論争に巻き込み、相手を論破しながら、自分は無知の知という姿勢を取る。「あなたは知っていると言いながら知らないが、私は自分が知らないことは知っている」からエライ、という議論である。しかし「ムチノチ」という4つのシラブルを発話すれば論争に勝てる、というなら、気の利いた小学生でもできることである。そんなことに意味があるとは思えない。

しかしソクラテスが論争で、相手に困難な(多分回答不可能な)問を与えながら自分では答えられない(その努力もしない)という態度を取るの、やはりフェアには見えない。では彼は何をしようとしているのか。

関曠野がいうようにソクラテスが自分で(無知の知による)知者を演じている(無内容な)自作自演の彫像だとしても、その像がポーズとして取っている姿勢に意味がある、というのが私の考えであった(拙稿「法における発見——反レトリック試論『問としての〈正しさ〉』NTT出版、2011年、第1章、参照)。

「自分は無知だが、そこに知るべきものはあるのだ」というポーズは、それを知ろうと努力する方向へと人々を導く。単純で素朴だが知力に長けた若者たちは、ソクラテスが示した方向へと(本物の知の)矢を放ちはじめだろう。信仰や慣習、常識などから自由な、理性(ロゴスの語はストアの時代になってからだろうから、ここではエピステーメまたはソフィアと言われている)的な問題の処理、大規模な世界理解の改変、など後に(たとえばフランス啓蒙などの)「哲学者」が行おうとした活動の端緒がそこにはある。もちろんこれは同時に、成功の保証のないかなり危険な破壊行為でもある。だからソクラテスは、訴追された訴因(ポリスの神を信じず、異教の神を持ち込み、若者を墮落させた)について、有罪なのである。

しかし、これにはいくつかの留保が必要であるように思う。

民主主義的な政治を行っていたアテナイに対して、知の観点からそれを批判するというのは、ソクラテスの後プラトンが取った基本戦略である(拙稿「民主主義——その認識論的基礎と機能のための条件について」前掲書第13章、参照)。ここでのポイントは、プラトンが必要な(魂の世話の)知がすでに(善のアイデアの観照によって)哲学者の手に入っていると(しかしその内容は示さない)のに対して、ソクラテスはただ、矢を射るべき方向を示しているだけで、「無知」を主張している、という点にある。

すでに正しい解答を知ってしまっているという意味の知者がいるなら、民主主義的な手続きは余計であるだけでなく有害であろう。数学問題の解答を民主主義の手続きで決めるのは愚かだからである。むしろ、大きなジグソー・パズルを社会の全員でやる、といったマイケル・ポラニーの描く自由社会のイメージがこれに変わるものになるのかもしれない(『自由の論理』)。

もう一つの問題点は、ソクラテスが取っている(そして対話編を書いているプラトンもそれを支持している)らしい想定である。私が疑っているのは、以下のような発想である。

「善のアイデア」がもし「知られるなら」、つまり「善い」という形容詞の本質を知ることができれば、すべての善きものを知ることができる。善き家、善き人生、善き魂、善きポリス、善き政治……。だから、善のアイデアを観照した者は、理想的なポリスの指導者になれるのである。同じ論理を「知」に適用すれば、「○○の知」において、○○を特定しなくとも「の知」の部分だけ解明すれば、すべての知を自分のものにすることができる……。

無知の知論は、エピステーメの意味での知の存在を前提し、人々をそれに駆り立てる。そしてソクラテスの想定している知がこのようなものだとなれば、それは大きな誤りだと言えない。むしろ個々の○○の方が重要なのである。